

# 夢と理想は ビジネスで 実現する

## 氷河期世代が目指す新しい野望の形

一人ひとりがチェンジメーカー。世界を変えたい。

社会貢献のビジネスモデルをつくりたい。

ホリエモン以後、新世代の野心家がめざすビジネスとは？

ライター 齊藤真紀子 イラスト ワタナベケンイチ 写真 家老芳美

会社帰りにビールでのどを潤せば、途上国の子どもたちに本を1冊プレゼントできる。3月上旬、東京・八芳園で開かれたイベント。「社会貢献」は楽しく気楽に！の趣旨に賛同して集まった約600人がカンパニー！ビール1杯分の値段に、上乘せされた100円で、アジアやアフリカの子どもたちに本1冊

を贈る。1年前から毎月、都内のパブやレストランで開かれている。イベントの主催者はアメリカのNPO「ルーム・トゥ・リード」。寄付やイベントで集めたお金でインフラ整備などの教育支援をする。マイクロソフトの役員だったアメリカ人のジョン・ウッドさん(46)が1999年

に設立した。識字率アップを掲げ、世界9カ国で本や学校、図書館を寄贈してきた。米サンフランシスコを拠点に、支部は世界各国・地域に42カ所。日本の寄付額は香港、ロンドンについて第3位。資金集めに奔走しているのは約1000人のボランティアアスタフだ。他の国に比べてもその数もやる気も伸び盛りの「優秀チーム」だ。

### 数値化されたビジョン

今年1月、その取りまとめ役として、日本初の職員に採用されたのが、松丸佳穂さん(36)だ。2年前、友達に「手伝って」と言われたのが始まりだった。以来、ボランティアとしてイベントの運営にかかわってきた。



ルーム・トゥ・リード ジャパン専属職員

### 松丸佳穂さん

3月のジョン・ウッドさん来日の際、「アテンドをして驚いたのは、毎日手書きでたくさんの人にお礼状を書いていたこと」。スピード感と行動力に日々刺激を受けている。将来は日本の子どもたちが本に夢中になるような読書プログラムをつくるのが夢





テーブル・フォー・ツー事務局長

小暮真久さん

国際援助のニーズと社会に貢献したいという気持ちをマッチングさせるプロデューサーとしての任務は、「想いを生かせる天職。困難があっても、自分がやるべきこと、という迷いが無い仕事ですね」

ビジョンと、ほかのスタッフの「死に物狂い」な熱意だった。「2015年までに、1000万人の子どもたちが文字を読めるようにする」

ジョン・ウッドさんの掲げた目標は壮大だが、資金調達や用途が明確に数値化されていた。「これは実現できる」と確信した。

いまは、みずから個人や企業のCSR担当者に会いにいき、協賛を募る毎日だ。オフィスは金融機関の会議室を無償提供してもらった。今年の資金調達目標額は達成できそうな勢いだ。リクルートの社員だった20代、

「自発的に動く」「人に会いにくい」と上司にたたきこまれた教訓がいま、生きている。

リクルートでは情報誌を編集していた。数日徹夜が続いても、売り上げ目標が達成できれば、前に進むことができた。20代の自分にこれだけ仕事を任せてくれるという充実感があった。

だが、いつも頭の片隅に、「このままでいいんだろうか」「これが自分のやりたい仕事なんだろうか」



そんな疑問があった。30歳で結婚を機に退職した。

しかし、いまは違う。「この仕事は社会に絶対に必要だ」

と心から信じていることができる。モーレッツ社員だったころより忙しいはずなのに、どういうわけか疲れ知らずだ。

すでにテーブル・フォー・ツーの支援で、給食が普及しているルワンダに赴くと夢を語る子どもたちがいた。

「私はジャーナリストになったの」

3年ぶりに再会した14歳の女の子は、目をきらきらさせて話した。この笑顔が小暮さんの背中を押してくれる。

テーブル・フォー・ツーは企業の社員食堂やレストランで、カロリー控えめの健康食を提供し、1食20円分をアフリカの学校給食1食分にあてる活動をしている。今すぐに給食が必要な

持続できる支援の形

会社のためではなく、社会のために働きたい。それも「ビジネスモデル」をつくって実現したい。

「テーブル・フォー・ツー」というNPOで事務局長を務める小暮真久さん(37)も、会社員からの転身組だ。

今年2月、早魃の被害が著しいエチオピア北部のメケレという地方を訪れた。給食が必要な子どもたちを視察するためだ。1日1度の食事のままならない小学生が、集中力を欠いてふら

ふらしている。若い女性教師が元気づける歌をうたって、励ましていた。

「私はジャーナリストになったの」

3年ぶりに再会した14歳の女の子は、目をきらきらさせて話した。この笑顔が小暮さんの背中を押してくれる。

テーブル・フォー・ツーは企業の社員食堂やレストランで、カロリー控えめの健康食を提供し、1食20円分をアフリカの学校給食1食分にあてる活動をしている。今すぐに給食が必要な



「手元に1億円あったら、何にしたいかわからない。でも、NPOの活動は黒字にしないと、続けていけない。だから、活動が黒字になって成長していくこ

感情に触れる仕事を  
設立者である外資系コンサル  
タント「マッキンゼー」時代の  
先輩に誘われて始めた活動。収  
入は4分の1に減った。その現  
実について聞くと、こんな答え  
が返ってきた。



学校は、アフリカに「気が遠くなるほど」無数に存在する。だが、1年分の給食費2800万円を集めるのは、並大抵のことではない。長期にわたって持続的な支援の仕組みをつくるのが小暮さんの役目だ。企業に働きかけ、ボランティアスタッフと資金集めのプロジェクトを練り、年に数回アフリカへ現地視察に赴く。

日産自動車

大宮千絵さん

どうしたら疲れず、楽しみながら三つの活動を続けられるかを考え、買い物、映画、飲み会、スノーボードにも出かける。多忙なときは1日30分ぐらい「何も考えない」時間をつくり、できていることを確認、「全体としてゴールに近づいている」と考えるようにしている

とが、収入が増える充足感と一致する感覚になりました」  
「思い」を「ビジネス」のかたちにする小暮さんの活動が、著

書やメディアで知られるにつれ、「手伝いたい」という人たちが集まり、いまは100人近い社会人ボランティアがかかわる。「熱意と仕事のスキルを持った社会人との共同作業時間が、エネルギー源です」

いまはボランティア志願者が200人待ちの状態。多くが20、

30代だ。

コンパスポイント

(右から)事務局メンバーの飯田智紀さん、向江一将さん、小俣健三郎さん。集まると「志のレザ」パレヅになりす。NPO「テーブル・フォー・ツー」や、コラボ合同会社の寿町「コトづくり」、NPO「ミレニアム・プロミス・ジャパン」なプロジェクトに

るプロジェクトをしたかった」  
(外資系金融勤務、35歳男性)

仲間が情熱の魔法瓶

社会貢献の勉強会やネットワークも広がっている。

「仲間と会えば、人のために何かをしたいという思いを持ち続けられる。ネットワークは情熱の魔法瓶の役割です」

こう話すのは、大手商社に勤める向江一将さん(28)だ。2年前、大学の体育会の仲間4人で「コンパスポイント」を立ち上げた。円を描く軸、という名称にしたのは、社会に対していいことをしたいと思う人が、いつでも戻ってこられる場所にするためだ。口コミで集まった参加者は190人ほど。NPOの代表者を招いて勉強会を開く。

「会社では恥ずかしくて言えないことも、この仲間とだったらいくらかでも話せる。そういう人



スウィート・スマイル代表

山崎ひな子さん

スウィート・スマイルの活動のほか、ホームレス支援や孤児院、老人ホーム訪問、フェアトレード事業も手伝う。フェアトレードは、途上国の小規模農業者などから職業支援のため、適正な価格で商品を買取り、消費者に販売する。「勉強のため、経済学部の授業も聴講しました」



との繋がりを持ちたかったから」  
 メンバーである携帯電話会社勤務の飯田智紀さん(26)はそう話す。  
 勉強を重ねるうちに、社会貢献に携わるグループがいくつかできた。そのひとつが、日雇い労働者が多い横浜の寿町の街おこしプロジェクトだ。不況で日雇いの仕事が減り、高齢化も進む街に、若い人たちが集うアーススペースやユースホステルを増やす団体を手伝う。司法修習生の小保健三郎さん(28)も、研修先の広島から参加する。  
 「使命感をもってプロジェクトに取り組み自分が好きという気持ちもある。楽しく、かつよく続け、ビジネススマイルをもつてやり遂げたい」



コンパスポイントの仲間と語ると、いつの間にか朝になってしまふことが多い。

社会人としてプロボノ

「社会のために何かをしたい」「ビジネスでアイデアをかたちにしたい」

この想いを実現するために、会社と二つのプロジェクトと、3地点をまたぎかけ、走り回っているのが、日産自動車で働く大宮千絵さん(26)だ。前出のテンプル・フォー・ツーで、弁当箱作製などのプロジェクトにかわり、会社の同期と厚木の街

おこし運動にも取り組む。

日産自動車に入社したのは、「世界に通用するものづくりができる」から。いまのマーケット

「世界に通用するものづくりができる」から。いまのマーケットにイングリサーチの仕事はやりがいがあるが、

「部署が細分化されていて、考えや情熱をかたちにできない葛藤もあった」

一昨年、企画、生産、開発、物流部門などの同期20人で、お互いの仕事の内容を発表する勉強会を始めた。あるとき厚木事務所の同期が提案した。  
 「厚木の街おこしをやらなさい?」  
 働いている街や人を元気にし

たい。週末や半休を利用して企

画を練り、企業に出向いて協賛を募る。商店街や自治体、学校

にもはたらきかけ、アートオークションやコミュニティスペース

「社会人としての経験はまだ浅いけど、みんなで力を合わせればアイデアを実現できる」

この春法政大学を卒業する山崎ひな子さん(22)は、いったん就職を諦めた。08年度のミスキャンパス人と「スウィート・スマイル」を立ち上げた。知名度を生かして、NPOのキャンペーンなどをバックアップする。

自分も笑顔でいたい

現代福祉学部への入学の動機

は、小学生のときに読んだアフリカの飢餓問題の新聞記事だった。大学に入ると、老人ホーム

や孤児院で、ボランティアを四つも五つもかけもちした。人に

喜んでもらうのは楽しかった。親は「ホームレスの人たちを助

ける暇があったら、学費を稼がないさい」と反対した。早朝にカフェでバイトして、生活費を稼

いだ。

高校時代は、女性ファッション誌「Vivi」の読者モデル

「ザ・ミュー」だった。ところが、大学でボランティアを始めた

「ザ・ミュー」だったが、大学でボランティアを始めたら、気持ちも満たされ、お

しゃれにも買い物にも興味も薄れた。ミスキャンパスに応募したのは、「自分の言葉をブログ

やスピーチなどで、大勢の人に伝える機会ができるから」だ。自己PRではマイクを握り、「一日一日幸せを感じて生きよう」と語った。

就職活動ではJICAやNPOも回った。しかし、「自己犠牲」を説かれたり、「ミスキャンパスだからと思いがちな」と叱られたり。自分にとって、社会

貢献は明るいイメージだ。「一人でも多くの人を笑顔にするには、自分も笑顔でいたい。そうでなければ見返りを求めてしまつから」

将来の夢は一人ひとり簡単に社会貢献ができる仕組みをつくること。商品の購入やイベント

参加などで、企業を通して寄付ができる「コーズ・リレーテッド・マーケティング」式のビジ

ネスモデルなどを考えている。「スウィート・スマイル」を続けながら、複数のNPO団体を

手伝つつもりだ。